

知の時代での融合が、型から抜け出させるか

— 国立大学法人化後初めての新年を迎えて —



巻 頭 言

豊 田 政 男*

新年あけましておめでとうございます。皆様と共に2005年の新年を迎えられますことを心よりお慶び申し上げます。本年も皆様にとりまして多幸な年となることを心より祈念申し上げます。

国立大学も昨年4月の法人化後初めての新年を迎えることになりました。ある意味での一大改革の契機でもあった法人化が、あまり変わっていませんねと言われるなら、変革の契機を逃したことにもなります。

一般に、形式・制度・しきたりなどが、あまりにも完成され、それが過ぎると没落への一里塚といわれます。それは、自らが作った制度で身動きが取れなくなるのが衰退にもつながるといえるわけです。いつ、どのようにその枠から踏み出すかが難しい。世の中で、余りにも形式的な鎧を身に纏うと、その時代が安定し、形式で済んでいるときはよいが、変化が求められるときには対応できなくなることは多々あります。必ずしも大学がそうではありませんが、新制大学制度となってからの60年あまりの年月に慣れ、また、総合大学という規模の大きさは、自らが作った規則と制度のために、もはや自己崩壊を待つしか無いのではともいわれました。ただ、大学は、教育という基盤的な、かつ効果が現れるまでかなりの長期を要するがために、往々にしてそれが逃げとなることが多いのです。

大きな組織では、その内部の消長を待って組織を動かすことは難しく、改革は、既存の組織単位の融合から生まれることが多いのです。著者は、溶接を専門とする教育研究を行ってきました。すなわち、モノとモノのつながりを基本とするものです。その「つなぐ」は結ぶことでしょうか、まとめることでしょうか。ただ単につなげばそれで終わりなのでしょうか。モノづくりでも、単に「つないで造ればいいのでしょうか」と考えているとしか考えられないものが最近は多く見られます。それでは、本当につないだことにならず、必要とする(期待する)性能・機能を満足するような「つなぎ手」は得られないのです。

つないで造られる「溶接継手」とはどういうことでしょうか。「接」は(まじわる)とよみ、「妾」の転音で、とるの語源「執(しゅう、しつ)」からきている。「継」は「繼」の略字で、旁がつなぐで、語源「結」からきており、糸をつなぐ意。なお、「溶」は「鎔」の書き換え字で、金を入れるの意味の容からきており、(いがた、とける)と読まれ、「熔」は俗字である。溶接の溶の字は、もともと「広々と流れるさま」を意味し、つながれたものは、スムーズな力の流れが重要なのです。

このつなぐが、特に、異分野の「知」のつながりが、新しいものを生み、組織の変革にもつながるのです。

何も元に戻ることが至上ではありません。ただ、組織の強さは、「つなぐ」をしっかりと「係」いで、「繋」ぎとめ、離れようとするものを「維」ぎ止めておくことに、「結」びまとめなければならないのです。そのためには、「知」を「紹」ぎ「嗣」がなければなりません。「知」のつながりが新しい「知」を生み出すことを初夢として。



* Masao TOYODA
1944年4月生
1967年大阪大学・工学部・溶接工学科卒業
現在、大阪大学大学院・工学研究科・生産科学専攻、工学研究科長・工学部長、工博、溶接工学
TEL 06-6879-7559
FAX 06-6879-7561
E-Mail toyoda@mapse.eng.osaka-u.ac.jp